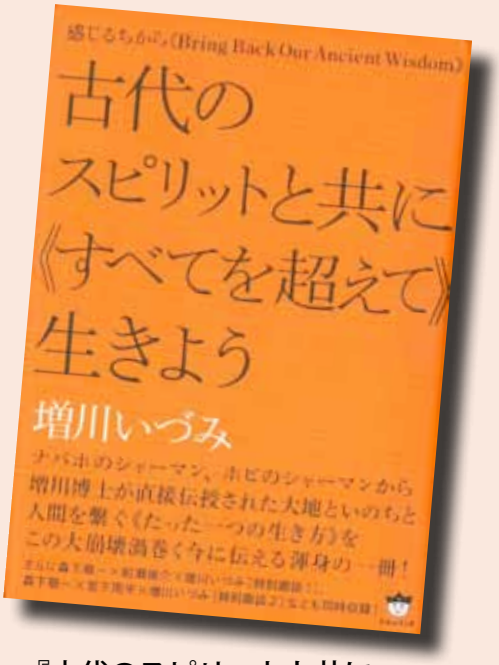
「徐福伝説」の真実
～知られざる日本人のルーツを探る～



『古代のスピリットと共に
《すべてを越えて》生きよう』
増川いづみ著　ヒカルランド刊
第３部より転載いたしました。

増川研究所は、全体が伝統的な和式建築。その清浄な空気に満たされた広間で鼎談が行われた

知られざる日本人のルーツ

森下敬一博士が月刊誌『森下自然医学』の「巻頭随想」で2013年9月号まで12回にわたって掲載してきた「徐福傳説」の特別編として、去る8月26日、徐福の功績を語り合う鼎談が行われました。

顔ぶれは、森下敬一博士、水の専門家で電磁波研究や音の振動療法にも詳しい増川いづみ博士、札幌の自然食品店㈱まほろばの社長で、浄水器開発で有名な宮下周平氏です。『森下自然医学』の連載「倭詩（やまとうた）」でもおなじみの宮下社長は、古文献の一つ『宮下文書（もんじょ）』が伝わる家系の末裔であり、徐福研究も行っています。また、今年（2013年）から連載「感じるちから」を執筆している増川博士は、古史古伝に精通する研究家でもあります。

鼎談は、増川博士の活動拠点である山梨県北杜市小淵沢で行われました。今年6月、徐福の生まれ故郷である中国の連雲港市を視察したばかりの森下博士、宮下社長は、今回、徐福のお墓があるとされる富士吉田市を訪ねる機会にも恵まれ、徐福の功績を世に伝えたい気持ちをいっそう強くされました。

徐福との縁に導かれて

森下　今回、宮下社長のご案内で、富士山麓に伝わる古文献の一部を実際に見せていただきました。徐福が書いたと言われる『富士古文書（宮下文書）』には、日本の古史が詳細に記されていますが、宮下さんは、『宮下文書』が伝わる家系の子孫らっしゃいますね。

宮下　はい。私は北海道在住ですが、幼少期に祖母から「お前の爺さんは山梨県南都留（みなみつる）郡明見（あすみ）村（現・富士吉田市）の出身だと、夜な夜な聞かされていました。

増川　刷り込まれていたんですね。

宮下　祖父は若死にしたため、父親でさえ祖父のことをよく知りませんでした。私が18歳の時、南都留郡明見村に伝わる『宮下文書』を知り、明見村を訪ねたのですが、その時は祖父の実家を探し当てることはできませんでした。

左より、増川いづみ氏、森下敬一氏、宮下周平氏

増川　宮下家は断絶していた……。

宮下　百年の間ですね。7～8年前に再び明見地区を訪ね、市役所の除籍簿の中から、ようやく先祖の宮下家を発見しました。実際にその住所に赴くと、なんと明治の当時と同じ番地に親族が住んでいたんです。以前から『宮下文書』に興味がありましたが、自分の先祖と繋がりがあったことに心底驚きました。

『神傳富士古文献大成』（全７巻・写真版）ダイジェスト版『神皇紀』。高千穂、大和朝廷以前に、富士北麓に富士王朝文明が存在したこと等が記されている

森下　実は私も徐福とは無縁ではないことが分かったんです。『宮下文書』を日本語に改訂した『神皇紀（じんのうき）』によると、富士五湖の北麓高原（たかまがはら）に、聖地・高天原（たかまがはら）があったと記されています。

その高天原に続く東方の丘陵地一帯が、高天原での生活に必要な物資や食料を供給する重要

な地域でありました。それが神奈川県津久井郡であり、私の本籍地なのです。徐福は、一般に知られている以上に多大な貢献をされた人です。徐福にご縁をいただいた人間として、残りの人生の一部を注ぎ込み、その功績をしっかりと伝えていこうと決意しました。

宮下　私も同感です。２０１３年には富士山が世界文化遺産に登録されましたね。この時期に、富士山を仰ぐこの地で鼎談の機会を得たのは、日本の歴史を幡（ひもと）き、日本の新たな扉を開くことにつながっているような気が致します。

徐福が日本に来た真の理由

森下　私は徐福について記された様々な文献に目を通したり、中国に赴いたりして研究を重ねてきました。多くの文献に、「徐福は、秦の始皇帝の命を受け、不老長寿の薬草を探しに日本に来た……」と記されています。

しかし私は、それは表面的な名目に過ぎないと考えています。徐福は大変な宗教家であり、自分の道を極めるために日本にやってきた……というのが真相なのではないでしょうか。

徐福は仏教の修行をするためにインド即ち天竺に渡ったと言われています。天竺には、神々が住む高天原があり、その天竺で、日本にも高天原があるという話を耳にされた。そして徐福は、日本の高天原に行きたいと願ったのではないでしょうか。だからこそ徐福は、日本に何度も視察に来ていたのです。

増川　下見に来たということですね。私も、徐福が何回も日本に来ているという話を聞いたことがあります。

私の祖父は、清の皇族である溥儀（ふぎ）の弟さんの溥傑（ふけつ）さんと親しかったのですが、その方から生前直接お聞きしました。

森下　そうですか。私も6月に中国に渡航した際、ある歴史研究者から、徐福は日本に7回渡航していた、と聞きました。7回かどうかは分かりませんが、日本列島の20ヵ所以上に「徐福が来たのは私の町だ」という地域が点在していますから、何度か来ていることは間違いないでしょう。

徐福を名乗れば歓待を受けられるということで、他の中国人が徐福を名乗り来ていた可能性もありますが……。

増川　なるほど。日本人から見れば、中国人はみな同じような顔に見えたかもしれませんね。

始皇帝はペルシャ人だった

森下　もう一つ、徐福が日本に来た理由があります。それは、徐福が仕えていた秦の始皇帝が、実はペルシャ人だったことに深く関わっています。中国人（漢民族）ではない始皇帝には敵が多かったのです。

始皇帝の身に何か起これば、その一族は即座に粛清させられるでしょう。徐福はその事態を免れるために、先発隊として日本へ赴き、始皇帝を日本に招くための準備を整えていたと考えられるのです。

宮下　確かに、日本の各地に神代文字があり、その起源はペルシャ文字だと言われていますよね。

増川　ペルシャ文字は日本の古文献の中に多く発見されています。また、ペルシャの装飾品が、5千年前の地層から出土しているんです。

森下　神代文字には何種類かあり、その中の

一つに現在のハングルと同じものもある。それはともかく、始皇帝がなぜペルシャ人なのかというと、始皇帝の父を王の座に就かせた呂不韋という男が鍵を握っています。

増川　神代文字の阿比留文字がまさにハングル文字と同じですね。阿比留草體文字がペルシャ文字の原型とかなり似ています。呂不韋はペルシャ人ですね。

森下　名前からして漢民族ではありません。呂不韋は、中国の邯鄲に住み、ペルシャとの間を行き来して商売を営んでいました。ある時、呂不韋は、趙の人質となっていたペルシャ人の子楚（始皇帝の父の幼名）を見て、「比奇貨可居（これ奇貨なり。居くべし）」と言いました。つまり、「これは珍しい品物だから買っておくべきだ」と考えて、子楚に投資したのです。当時、秦に君臨していた安国君の寵姫である華陽夫人に実子がなかったことから、呂不韋は子楚を華陽夫人の養子にさせ、後の荘襄王として即位させることに成功しました。当時、呂不韋には、ペルシャ人の踊り子である趙姫という恋人がいたんですね。その趙姫を子楚が気に入り、絶対に欲しいと言った。それまで大金をつぎ込んで子楚に地位を築かせた呂不韋は、趙姫までも子楚に渡してしまいます。

増川　恋人でも何でもあげてしまうんですね。

森下　ところがその時、趙姫はすでに呂不韋の子を身ごもっていました。そうして生まれたのが始皇帝というわけです。

宮下　ペルシャ人の両親の元に生まれたということですね。

増川　純粋なペルシャ人だった始皇帝は、顔を隠すために冕冠をしていたんですね。

森下　碧眼で鼻が高く、肌が白いという状態では、中国人になじまなかったからでしょう。

中国を脱出した徐福

森下　始皇帝の身を案じた徐福は、中国脱出を試みました。それは、徐福が日本に率いてきた人や物の数々を見れば明らかです。徐福は、大工や金属加工、畑や稲作の専門家などありとあらゆる職人を連れ10代から年代別に男女半々、約50人ずつ、５５０人以上もの人間を引き連れ日本に向かったといいます。冶金の道具から、吹革、踏鞴や糸巻きに至るまで生活に必要な道具もすべて積んで船出しました。

増川　武器・弾薬から一切の生活道具、ものすごい精鋭部隊を引き連れ、国が傾くほどの財宝を持って出航したと言われます。中国に帰る気は最初からなかった？　日本で理想郷を作ろうとしたのでしょう。

森下　これほどの準備を整えるには、始皇帝との打合せなしには不可能です。もう一度と中国の地を踏むまいという決意の元で、徐福は出航したに違いありません。

増川　一般的には、徐福は結局、始皇帝を迎えに行かなかったという説が主流ですよね。

森下　ええ。始皇帝は徐福が出航して数ヶ月後、病で亡くなったとされています。始皇帝の死後、彼の側近であった趙高と李斯は、すぐさま始皇帝一族を排除しようと画策し、始皇帝の遺言状を書き換えました。

　王位継承者を、長男の扶蘇ではなく、末子の胡亥に仕立て上げたのです。武勇のある長男より、出来の悪い末子を皇帝にして操ろうとしたのでしょう。

宮下　さらに趙高は、同僚で文字を制定した李斯をも謀殺しましたね。

徐福関連の古文書に見入る。お蔵に大切に保管されていたものを、特別に開帳していただく

増川　始皇帝は中国で亡くなったことになっていますが、彼は暴君でもある一方、相当賢い人物だったと言われています。徐福が日本に旅立った後、「迎えが来ないなあ」などと悠長に待っている人間ではなかったでしょう。徐福の裏切りを知ろうものなら、追っ手を送って殺していたに違いありません。始皇帝は中国で死んだのではなく、徐福の出航後、後追いの舟に乗って日本に来ていたと考えた方が妥当では？

宮下　森下先生もおっしゃる通り、始皇帝と徐福は裏で結託していた方が自然で無理がないですね。

増川　そうです。私は古文献の研究をしている台湾の人から、始皇帝の三種の神器の一つと言われる鶏血石（けいけつせき）の龍を見せていただいたことがあります。全部で16体の見事な龍の像は、始皇帝しか持っていないとされています。そうした始皇帝の三種の神器は、中国から消えてしまっているんです。その一部が台湾で発見されていることから、始皇帝は台湾ルートで日本にやってきた可能性が高いでしょう。

教科書に載らない徐福伝

森下　徐福や始皇帝が熱望してやってきた日本には、高天原という素晴らしい聖地がありました。それが現在の富士五湖地方ですね。

宮下　富士五湖は、富士山が何度も噴火して5つに分かれましたが、最初は巨大な一つの湖でした。大正時代、『宮下文書』を読んだ工学博士の神原信一郎（かんばらしんいちろう）氏は、富士山麓の地質をあまねく調査し、その記述が史学的・地理学的にも正しいことを立証したのです。大正10年に三輪義熙氏が、『宮下文書』のダイジェスト版『神皇紀』を著し、一連の事実を世に問うたことから、三大紙をはじめ全国20社以上の新聞社が大絶賛し、国内でセンセーションが巻き起こりました。斎藤實内大臣（さいとうまことないだいじん）や東大の歴史学者など専門家たちが「富士文庫」を結成して調査に乗り出しましたが、1年でその調査はクローズされます。その結果、官憲の弾圧により『宮下文書』や『竹内文書』をはじめ、日本にある数々の古史古伝は偽書として扱われるようになりました。

増川　不可解ですよね。徐福は、中国の『三国志』や『史記』など多くの文献に登場しますが、日本の歴史には出てきません。

宮下　まず『古事記』や『日本書紀』に富士

山梨県富士吉田市小明見にある徐福のお墓とされる「徐福祠」。他に、徐福の魂がツルとなって、上空を舞った後に果てた……という「鶴塚」もある

山の記述が一つもないことや、徐福の存在を抹殺しているのは、不都合な真実があるからでしょう。

増川　『宮下文書』が事実だとすれば、日本の歴史が変わり、天皇家の存在も異なるものになります。

私は、『竹内文書』の竹内家を何度も取材しているのですが、徐福が竹内家にやって来たという記録も残されています。竹内家は、全国の地図やローカルな情報が集まってくる場所でした。徐福は竹内家で、各地の地図をすべて複写して帰ったというのです。徐福は日本を手中に収めようとしていたのかもしれません。

宮下　1950年に、中国燕京大の衛挺生博士が、徐福が神武天皇だったという説を唱えていますね。

増川　でも徐福はどちらかというと裏方の人間のような気がして、神武天皇は始皇帝一族の誰かだったのではないかと考えています。

富士山を背に“諏訪の森”に鎮座する壮麗な北口本宮富士浅間神社。「富士山のお山開き」「吉田の火祭り」でも有名（富士吉田市上吉田）

古文書が保管されているお蔵の前で記念撮影（宮下家の敷地内）。前列中央が土橋壽氏（左）と森下敬一会長

徐福関連の“超貴重”な古文書の数々（富士吉田市内・宮下明久家所蔵）

徐福が残した日本の起源説

森下　徐福の尊敬すべき所は、日本に来た際、最初に日本の歴史を正確に把握しようとした点です。何年もかけて、日本人の衣食住、農作物から糸のつむぎ方まで、多くの生活革命を授けてくれましたが、ただ単に 中国の技術を日本に伝えようとしただけではないのです。

増川　日本の歴史を文字にするのは大変な労力だったでしょう。

森下　日本の神代時代を36人の人に教え伝えたと言われている「高天原 三十六神戸（かんべ）」の語り部の口述を整理して漢文化しました。日本の神代時代の歴史は諸説ありますが、徐福の書いたものが本物に近いのではないでしょうか。

宮下　私もそう思います。どうしても国家権

力に都合のいいように正当化するのが国史作りの常ですから。

増川　ある程度、その時代の権力者の意向に添う形にならざるを得ませんよね。

宮下　その点、徐福は日本と利害関係のない大陸の人で、客観的に事を記述したと考えられます。一般的に言い伝えられている日本神話の前半は、イザナギとイザナミの一神により淡路島が作られたなどという御伽噺（おとぎばなし）・譬（たと）え話で終始しています。

一方、『宮下文書』には、大和王朝以前にも王朝が存在することが記され、歴代神皇の名前が詳しく書き連ねられているなど、叙事的で現実味があります。『宮下文書』では、日本の王朝は富士王朝（高天原王朝）が起源であり、次に高千穂、大和と続きます。

鵜茅葺不合尊（うがやふきあえずのみこと）王朝は51代あるとされるも、『古事記』では一代で、２７５０年間を一括りにしていますが、どうでしょう。

増川　『竹内文書』でも、鵜茅葺不合尊朝は50代ほどです。

宮下　そうですね。また、『古事記』では、最初の神様を天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）としていますが、『宮下文書』では天之能火夫神（アマノホホデリノカミ）とし、全部で七代の神が存在しています。

そうした神皇期と人皇期の年数、神武天皇以後の皇統の年数を合わせると、現代までおよそ１万４００年経っている計算になります。私は以前、『神々の指紋』（翔泳社）の著者で有名なグラハム・ハンコック氏から、大洪水伝説について伺ったことがあります。アトランティス大陸の滅亡があり、ノアの方舟伝説が続くわけですが、ハンコック氏によると、それらは１万１５００年前とのこと。また、中国の宋代

貴重な古文書（『富士古文書』）―『開闢神代歴代記』―に見入る森下会長一行（宮下家居間）

徐福のお墓（徐福祠）に感謝の礼拝をする森下会長（富士吉田市小明見）

漢々しい面立ち。若き日の徐福像（富士吉田市小明見）

に、大易者の邵康節という儒学者がいたのですが、彼は『皇極経世書』の中で、天地開闢から終焉の年までを記しているんですね。それで前の大浩劫（大災害）から今を計算すると、七会二運の1万1520年となり、易の暦数と考古学の年数が一致しているんです。

増川　『宮下文書』の年数とも近いですね。

宮下　ノアの方舟が、中央アジアのアララト山に漂着して以後、間もなく天皇の万世一系の兆しが現れ始めたということになります。しかも、ノアの方舟は実際に発見され、宇宙衛星ランドサットの写真に収まっていますね。

増川　本物だとわかったんですね。

日本人のルーツと長寿郷

宮下　『宮下文書』によると、伏義・神農・黄帝という伝説の皇帝が古代中国にいたとされていますが、次々と遺跡が発見され、これが歴史上真実であるらしいことが分かってきました。

日本の始祖は神農だと記されています。そうした情報などを総括すると、原日本人は、パミール高原やアララト山方面から天下り（天孫降臨）、インド・東南アジアや大陸を通り北上して日本に辿り着いた民族だと考えられます。

それで、私は感銘を受けたのですが、森下会長が長寿調査で歴訪された中東から東南アジアにわたる様々な地域が、古代日本人がたどって来たであろう道と一致していたんです。

森下　コーカサス地方、パミール高原周辺、フンザ、新麗ウイグル自治区など、全部で60回は行っています。

宮下　そんなに何度も踏査されていらしたとは実に驚嘆すべきことです。ご縁の深さ故でしょうか。増川さんもこの一帯にお詳しいですよね。

増川　私のほうは水の研究のためですが、森下会長と同じ地域を訪れているんです。この一帯はエネルギーラインです。照葉樹林帯であり、特殊な鉱物も出やすい。土に微生物が多いので発酵しやすく、ヨーグルトなど食べ物も質がいいです。

宮下　遺跡も多い上に、五大聖者もこの発酵ゾーンで生誕されている。霊気も収斂して人も覚醒しやすいのでしょう。

森下　長寿調査として訪れてきた地域が、遠い祖先が辿って来た道であったというのは、自分でも不思議な感じです。調査は名目で、まるでお礼参りをさせていただいたかのようです。日本の歴史はもっと古くて奥深いのですね。今後も日本史の真実や徐福の功績について、広くみなさんに伝えていきたいと考えています。

鼎談は和やかな雰囲氣のなか、刺激的な言葉の飛び交う内容に。「森下会長が長年にわたって調査してきた長寿郷は、日本人のルーツと重なっていますね」（宮下氏）